

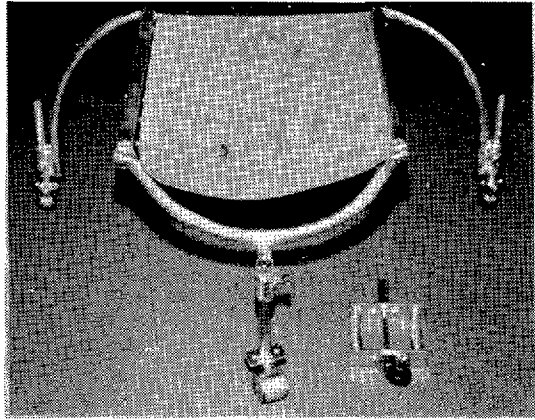
図2

「四つ這い」用移動用車

前脚および後脚にはスプリングによる上下運動を支えている。取りはづしである前脚は上下、左右運動も与えている。

胸部および腹部のクッションは、下はスプリングにより支持されて上下の浮き沈みを調節する。

金属枠は軽合金が重量の関係で望ましい。



6. 電動式椅子便器の改良

国立療養所西多賀病院

菊地 伊三郎 沖田 ふみ子
長谷川 信雄 川村 とよ子
佐藤 弘子

〔はじめに〕

当院には、PMD患者の病棟が4病棟、ベット数は160床ある。年齢は、満5才から65才まで体重は18kgから76kgと幅が広く重度の患者が多数いる。そのため、看護業務の内容及び看護力の過重など深く問われているのが現状である。

業務内容は殆んどが、日常生活の援助である。その中でも排泄に関する援助は、看護力の比重の大半を示めており、大きな問題と言っても過言ではない。そして又患者の多くは、病苦よりも自分で自分のことができないことにいらだちと苦しみを訴えている。

患者ケアに当たる看護者にとって、より容易に、かつ援助しやすく、患者にとっても容易に援助を依頼することができるように、種々の看護機器の工夫、改良がなされている。

私達は、その中で、看護力の大半をしめている排泄についてとりあげ、患者がより安楽に、又看

護者がより容易に援助できるように便器車の改良を試み、昨年度にひきつづきここに報告する。

〔研究方法〕

昨年度の電動椅子便器車改良の欠点を考察し、患者に使用してもらい、再度改良を加え、今までの電動椅子便器車の総まとめとして、PMD患者にアンケート調査を行なった。

〔研究内容〕

昨年度の電動椅子便器車の欠点を条件として改善を試みた。

1. 昨年度の欠点

- ① コントロールボックスに重量がある為、自分で持つ事が出来ない患者もいる。
- ② トイレにて使用可能ではあるが、現在使用している場所では、リクライニングして使用できない。
- ③ 便器車に、さし込み式便そうを取り入れたが、リクライニング使用時、殿部と便そうの間隔がなく殿部汚染の可能性がある。

2. 欠点改良の目的

- ① コントロールボックスを最も操作しやすく、重量感を感じないように工夫する。
- ② リクライニング使用可能で、又殿部の汚染が除去できる用具の工夫をする。

3. 目的を考慮し、次の材料を選定した。

- ① コントロールボックスにマジックテープを使用してみた所、取り扱いが簡単で患者の希望に合わせ移動することができる。
- ② さし込み便器の代りに便そう車を使用した。殿部汚染もなく、場所をとらず使用できる。

以上の様に、電動椅子便器車の欠点に改良を加え、トイレにて排泄できないPMD患者に使用してもらった。

〔昨年度の欠点改良の結果〕

1. コントロールボックス

今まで重量感があり、上肢の拘縮が強い患者は、自分で持つことができず、コントロール操作できなかったが、抑制帯、両サイド及びコントロールボックスにマジックテープを取りつけ移動可能にしたほとんどの患者は、コントロール操作がしやすくなった。

2. トイレにて使用時リクライニング出来ない。

これは、トイレの構造上の問題であり、現在のトイレでは、スペースが狭くリクライニング使用不可能である。

3. 便そうについて

移動便そう車を使用し、リクライニング時でも、殿部との間隔も充分であり、汚染の心配は全くなくなった。

トイレにて使用時は、いつも便そう車がそばにあるが、他の場所で使用する時は移動便そう

車を前もって準備しておき、その後に電動椅子便器車に患者を乗せ移動するという方法をとった。

〔今までの電動椅子便器車のアンケート結果からみて〕

1. 電動椅子便器車を使用して

安定感、安楽、安心感があり、体位保持は全身の変形及び拘縮が少ない患者は、大部分が良いと答えているが、全身の変形及び拘縮が強い患者は体位固定が、むずかしい。

2. リクライニング使用に関して

大部分の患者は、自分で背もたれや、下肢をリクライニングしても体位保持可能であるが、変形が強度な患者は、リクライニングする事によって固定した体位がくずれてしまう事もある。

3. 抑制帯使用

抑制帯については、ベルトの幅及び感触も良く胸部や腹部の圧迫感も少なく、体位固定ができ、大部分の患者が良いと答えている。

4. 枕について

約50%の患者が頭の固定ができ、使いやすいと答えているが、残り50%の患者は枕にくぼみがなく、頭の固定ができればよいと答えている。

5. コントロールボックスについて

患者の約80%が大きさ、形、位置、コントロール操作等は、このままで良いとの答えであるが上肢に拘縮の強い患者では使用不可能との答えもあった。

〔考 察〕

1. 電動椅子便器車のリクライニングのスピードが、背もたれが約2分、下肢が30秒かかる。それで、もう少しスピードがあっても良いのではないかという意見があったがPMD患者にとって、体位固定するのに0.1 cmの移動にも敏感である為、これ以上のスピードは無理と思われる。
2. 車体の重量感がある割合には、車が小さく移動時、重く感じられる。新たに便器車を作製する時は、車体を軽かいにする事が必要である。
3. 背もたれの高さが調節できれば、患者の体位調節も楽に出来るのではないと思われる。
4. 電動椅子便器車をトイレにてリクライニング使用できないのは、残念である。もう少しトイレのスペースがあれば良いのだが……。

〔おわりに〕

私達は、以上の点から便器車の研究、改善、改良を通し使用した結果、好評を得る事ができた。臨床において、大いに活用して行きたいと思う。又、これを機会に、今後PMD患者が最も容易に使用する事のできる用具の工夫等を、将来の課題として取り組んで行きたいと思う。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

〔はじめに〕

当院には、PMD 患者の病棟が 4 病棟、ベット数は 160 床ある。年齢は、満 5 才から 65 才まで体重は 18kg から 76kg と幅が広く重度の患者が多数いる。そのため、看護業務の内容及び看護力の過重など深く問われているのが現状である。

業務内容は殆んどが、日常生活の援助である。その中でも排泄に関する援助は、看護力の比重の大半を示めており、大きな問題と言っても過言ではない。そして又患者の多くは、病苦よりも自分自分で自分のことができないことにいらだちと苦しみを訴えている。

患者ケアに当たる看護者にとって、より容易に、かつ援助しやすく、患者にとっても容易に援助を依頼することができるように、種々の看護機器の工夫、改良がなされている。